

聖地ワラーナシーのスラムとスウィーパー

二 木 敏 篤

(1995年1月20日受理)

I はじめに

第二次大戦後に独立を達成した発展途上国の都市では、いずれもスラム地区が膨張を続けてきた。アジア諸国の都市でもスラムは世界史上かつてない成長を遂げて今日に至っている。このスラム急増の要因として都市や地方の町からの大量の人口流入、それに都市自体の人口の自然増加があげられる⁽¹⁾。つまり都市の発展に伴う人口の吸引力以上の人口増に都市のインフラストラクチャーの整備が追い付けない、つまり「過剰都市化 over-urbanization」⁽²⁾の進むことが要因となっている。

筆者もインド都市のスラムに関して若干の考察(1988, 1989)をおこなったが、それは文献、資料に基づきまとめたものであった。1992年にはインドヒンドゥー教の聖地ワラーナシー(Varanasi)に於いてスラムの予備調査を実施した。内容は杜撰なものであるが資料を含めてとりあえず報告する。

II ワラーナシーの概観

ワラーナシーは、我が国ではベナレス(Benares)⁽³⁾で知られるが、ムガル帝国のアクバル大帝の頃からバナラス(Banaras)の地名が用いられるようになった。古くは、カーシー(Kashi)⁽⁴⁾と呼ばれた。人口は、102.6万人(1991年)、インド第22位の都市である。市域はインド大平原を流れるガンガ(Ganga)中流域にあり、市街地はガンガ左岸の自然堤防を中心に立地している。ガンガは、このあたりで流路を東から北へ大きく半円形に変えるが、この点にヒンドゥー教の最大の聖地と言われる理由の一つがある⁽⁵⁾。因みに、ワラーナシーの地名は市域の南北でガンガに流入する二つの支流、ヴァルナ(Varuna)川と南のアーシー(Assi)川に挟まれた土地に由来する。市街地はガンガ左岸のみに発達する。

ワラーナシーは、紀元前700年以来今日に至るまで市街地が連続性をもって発達してきた世界最古の都市の一つである。ヒンドゥー教は勿論、ジャイナ教、シーク教の聖地であり、市北部のサルナート(Sarnath)は釈尊による初転法輪の地として仏教にとっても重要な聖地である。特に、ヒンドゥー教最大の聖地で“the Soul of India”として全国から多くの巡礼者を迎えているが、世界各地からの観光客で賑わう大観光都市でもある。最大の観光ポイントは、ガンガの舟上からの沿岸の風景と沐浴するヒンドゥー教徒の姿を眺めることである⁽⁶⁾。本市の観光地理学の研究としてDube(1968)やKayastha and Singh(1977, 1983)などが挙げられる。

ワラーナシーの歴史、宗教、文化に関しては、Havell(1933)の古典的名著があるがEck 女史(1983)の大著も注目される。地理学関係では、Singh(1955, 1974)に代表され

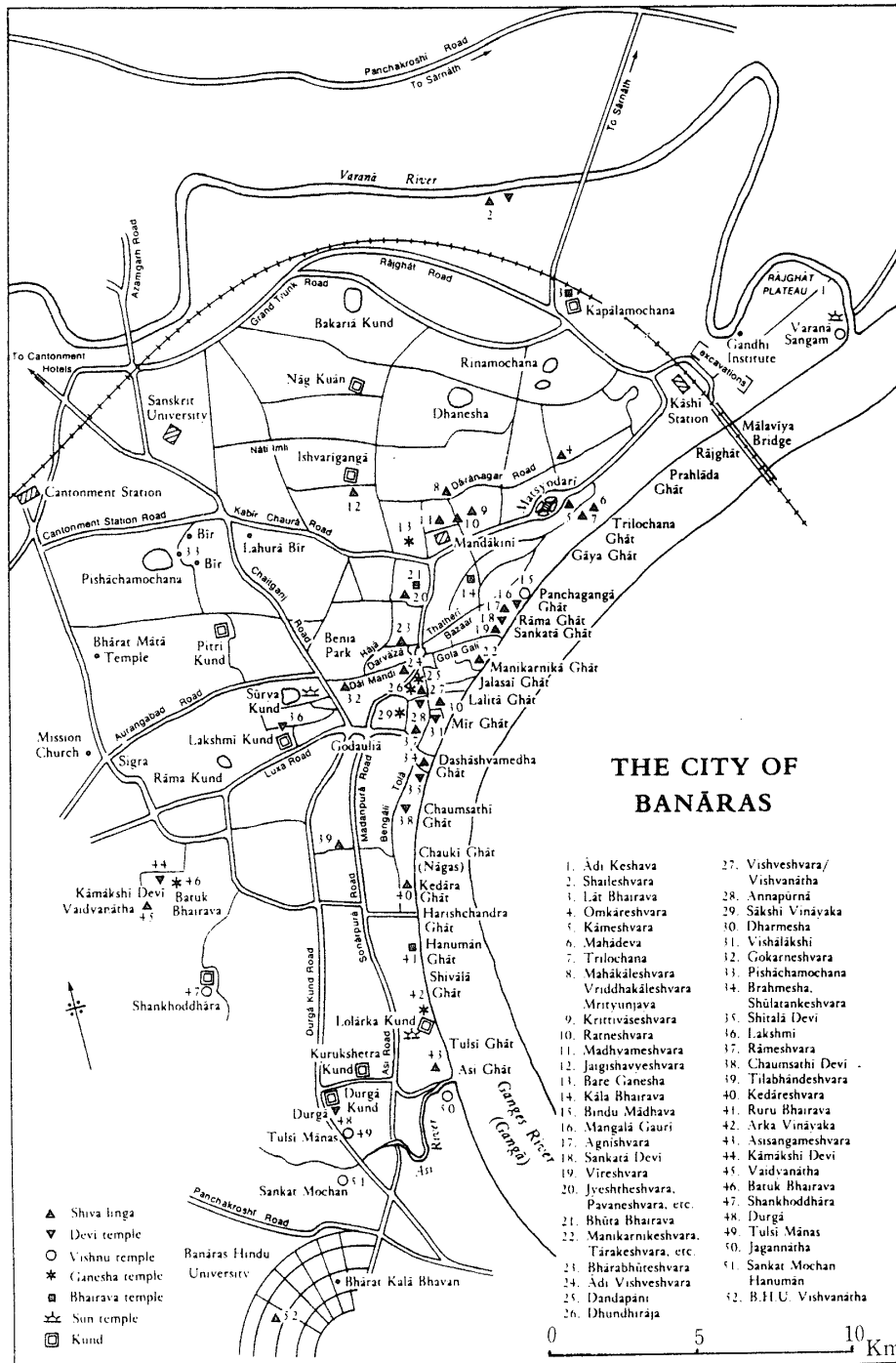


図1 ワーラーナシー市街図 L. E Diana 原図

るが、我が国では北川建次 (1974) の研究がある。1970年代から人間主義的地理学 (Humanistic Geography) の発展が目覚ましいが、その一環として宗教地理学的研究が進んでおり、ワーラーナシーを対象とした研究の代表として Singh (1980, 86, 87, 88) に Kumar (1987), それに Singh (1993) などが挙げられる。

ワーラーナシーは古来、北インド水陸交通の要地として栄えてきた。ガンガ水運の衰退後も19世紀に建設された北インドの幹線道路、グランドトランク (Grand Trunk) 道路が開通し20世紀初頭の鉄道の開通とも併せて交通の要地として発展している。市内には、従業員千名以上の大規模企業は国営のディーゼル機関車工場、サハプリア (Sahapuria) の化学肥料工場、ラムナガル (Ram Nagar) の製紙・パルプ工場、ムガルサライ (Mughal

Sarai) の鉄道工場, それに火力発電所を除き目立ったものはない。しかし, 小規模家内工業としては, 木綿, 絹などの繊維工業や農産物加工, 特に高級サリー, 真鍮細工のほかに木製玩具などの生産で全国に知られている。ウツタルプラデシュ (Uttar Pradesh 以下 UP と略称) 州の主要都市の中で大規模工場労働者の全労働者に占める比率は最低であるが家内工業従業員人口は他都市を圧倒している⁽⁷⁾。

III ワラーナシーのスラムとスクォッター地区

スラム (Slum) の語源は「うたた寝」「無為に過ごす」を意味する英語の slumber に由来するが, その定義は変化しており厳密なものはないが, 一般に「居住者の健康, 安全, 道徳, 福祉等が疎外されるほど住宅が荒廃し低質化し, 不衛生化している居住地域である」⁽⁸⁾ が代表的である。今一つは国連による「密集化し, 老朽化し, 不衛生化しあるいは必要公共施設やアメニティ (快適性) の欠如などの問題を抱えた一戸の建物, 建物群または地域であり, こうした環境のゆえに当該地域の住民やコミュニティの健康, 安全, 道徳等がおびやかされているところ」⁽⁹⁾ がある。このスラムと同義的に使用されるものに Dwyer (1975) の「自然発生的集落 spontaneous settlement」⁽¹⁰⁾ がある。インドでもスラムの定義は都市により異なるが, デリー (Delhi) のインド奉仕協会 (Bharat Sevak Samaj) の「スラムとは, 構造面では老朽化し, 荒廃化し, 蜜住化し, 修理不能であり, 換気, 排水, 水供給など衛生施設の欠如など通常の公衆衛生条件を維持しえず, 極めて不健康で人間居住にとり不適当と考えられる市域の一部分である」⁽¹¹⁾ が代表的である。スラムの用語も問題が深刻なだけに多様である。デリーではカトラ (katra) ジュギージュンプリ (jhuggi jhumpri), ジュギージョパディ (jhyggi jhopadi), バステイ (basti), ガリー (galli) などが用いられており, カルカッタ (Calcutta) ではボステイ (Bustee) が一般的である。ボンベイ (Bombay) ではチョール (chawl) やゾパドパテイ (zopadpatti), マドラス (Madras) のチェリー (cheri), バンガロール (Bangalore) のアハタ (ahata), ハイデラバード (Hyd-

表1 ウツタルプラデシュ州の中心都市のスラム K. K. Dube (1976) による

類 型	立 地	構 造	特 色
古いスラム 旧市域スラム	市街地中心部の 周辺部	パッカ (恒久) 住宅, 但し荒廃すむ, 2, 3 階住宅	極めて過密, 殆んど修理されず一階は日陰で換気性なし, Kanpur で工業労働者の65.2%が居住, 1部屋当り人口15 人 (Kanpur) から4人 (Allhabed) ワラーナシーは5人
アハタ	工業地区の周辺部	囲い地, 個人有 (一 部市有) 部屋数1, 2部屋のパッ カの貸屋	浴室, 台所, 便所なし, 排水施設なし, 下層工業労働者 多い, Kanpur で600ヶ所
バステイ	旧市街地	カッチア (非耐久性) 住宅	Allhakhのみ, 乳しぼり人, 洗濯夫, 靴職人が多い
農村部スラム (アパディ, プルウ)	市周辺部の農村 主とし (低湿地)	一部分がカッチアの住 宅が卓越	雨期は悪臭ひどく, 極めて不衛生, 低家賃で貧困層が居 住 最悪条件のスラム, 洪水により浸水することが多い
新しいスラム	中・高級住宅地 区	一部パッカ住宅	中・上級住宅地, 近年の都市計画実施区域内に混在する スラム, 借屋で長屋がみられる, 一部上層家庭は他地域 移住, 犯罪多発地で悪疫流行する
一時的住居スラム	都市中間区域の 一部道路沿い	木の破片でつくられた 仮住宅, 古い空の容 器, ズック袋など	不健康地区, 乞食, スクォッター, 孤児などが多い

rabad) のペッタ (petta), マハラシュトラ (Maharashtra) 州のゾパドパテイクチャバステイ (zopadpatti quhchhavasti) などが用いられている。なおワーラーナシーを含む UP 州の主要都市ではスラムを3類型としてあげている (表1)⁽¹²⁾。

ワーラーナシーもインド諸都市の例にもれず深刻なスラム問題を抱えた都市である。最近40年間で人口は約2.78倍, これはインド100万都市ではカルカッタに次ぐ低い数値である。その原因の一つは, 近代工業の発達の遅れにあるが, それでも年率2.88% (1981~1991) をみれば人口増加は決して低いとはいえない。ワーラーナシーのスラムの成長にとり1947年の印パ分離独立とそれに伴う大量のヒンドゥー教徒のパキスタンからの移住,

更に1971年の第3次印パ戦争により多数の難民が流入し, 駅周辺と都市縁辺部に定住したことが大きな契機となる。市開発局 (Varanasi Development Authority) の報告では, 全人口の21.5%が市内72ヶ所のスラム地区に居住するという⁽¹³⁾。歴史都市としてのワーラーナシーは元来都市の中心部にスラムが少なく, 中世からのイスラム支配時代の住宅地, 時には市域北西部のカントンメント (cantonment) 地区⁽¹⁴⁾ や中産階級の住む市南部のベルプラ (Bhelpura) などに主として立地したが, 今ではその分布はほぼ全市域に広がっている。このワーラーナシーのスラムの中で最悪の環境にあると言われるのが

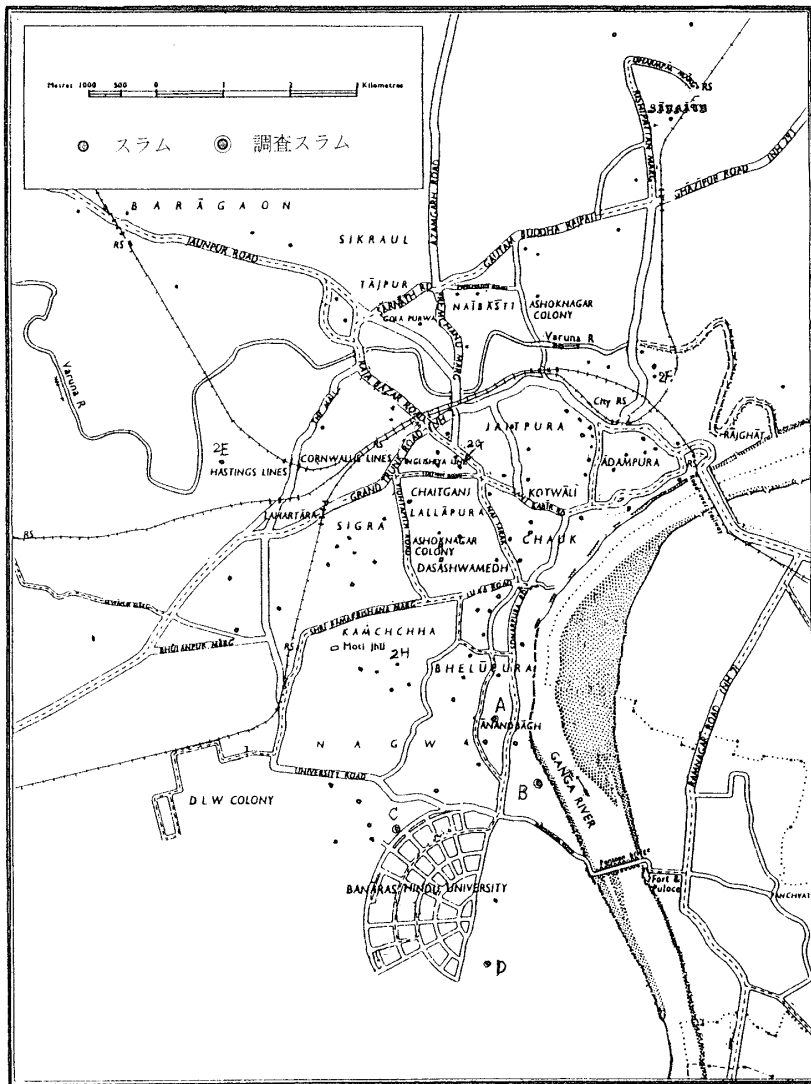


図2 ワーラーナシーのスラム

サライア (Saraiya, 図-2E), ファキーラトーラ (Fakira Tola, 図-2F), マルダヒア (Maldahia, 図-2G), バリガイビ (Bari Gaibi, 図-2H) である。そこでは, 僅か一箇所の水道, 便所を10世帯以上の人が利用している。

市開発局によるとスラムの85%が水供給, 便所といった生活基本施設を持っていないと言う。スラムの住民は, 指定カースト⁽¹⁵⁾が多く, その殆どは, 清掃夫, 織工, 洗濯夫, 露店商人, 煙草づくり⁽¹⁶⁾, リキシャ夫, 土工等を主とする日稼ぎ労働に従事している。特に, ワーラーナシーのスラムを代表する職種は, 清掃夫で, この数の多さが他都市との大きな

表2 スラム3地区の職業構成(1987) B. L 調査資料

	Maldahia		Bari Gaibi		Havelia	
	労働者数	同比率 (%)	労働者数	同比率 (%)	労働者数	同比率 (%)
農業・牧畜	—	—	—	—	15	20.3
織工	—	—	305	67.6	22	29.7
日雇い労働 リキシャ夫	6	1.2	26	5.8	28	37.8
土工	—	—	—	—	—	—
サービス業	490	96.1	37	8.2	2	2.7
事務	4	1.0	15	3.3	7	9.5
その他	10	2.0	68	15.1	—	—
計	510	100.0	451	100.0	74	100.0

相違点となっている⁽¹⁷⁾。

バナラスヒンドゥー大学(Banaras Hindu University 以下 BHU と略称)の地理学教室メンバーにより1987年11月18, 19日に実施されたスクォッター(Squatter Settlement)⁽¹⁸⁾調査の報告⁽¹⁹⁾から引用する。この調査の対象地区は69ヶ所で、これはごく小規模で調査困難の一部を除く、ほぼ全市のスクォッター地区が調査されている。その規模は小は僅か5戸(4地区)から最大は106戸のバリマルダヒア(Bari Maldahia)⁽²⁰⁾まで、人口規模ではピアリ(Piari)⁽²¹⁾の25名からバリマルダヒアの1,100人と著しい差がある。全市で総戸数2,035戸、13,863人で平均一地区当たり29.5世帯で2,009人、一世帯当たりの人口は5.83人である。バリガイビ⁽²²⁾とバリマルダヒアの2地区をみると、住民の教育水準は低く、子弟の教育に対する関心度も薄い。彼等の最大関心事は、よりよき仕事を求めることである。しかし、教育の低さが収入に反映し、マルダヒアとバリガイビでかなりの差があることがわかる。収入の源泉である職業面をみると、年収と大きく関係し、マルダヒアでは労働者の96.1%が清掃業に従事している。他の地区は、清掃夫は少なく行商人、小売店主、リキシャ夫の他に日雇いで建築関係の土工として働く者が多い。ただハベリアは、市北郊のサルナートの田園地帯にあるため20.3%が農畜産業に従事している。早朝自転車に搾った牛乳缶を載せて市内に向かう姿をよく見かける。

次に住宅状況を見ると、スクォッター地区は住宅が密集し荒廃し、非衛生的であるばかりか社会悪の温床ともなりかねない酷い状態である。その中でもマルダヒアは比較的良好なパッカ住宅⁽²³⁾が多い。これは、住民の生活条件の良さを反映している。他地区の住宅は、耐久性の無いカッチャ住宅⁽²⁴⁾が多い。これは、家屋材料として比較的容易に入手できる土やポリエチレンの布、ズックの敷布、石綿板等が用いられている。ただハベリアは、田園地帯にあるためか木造住宅が51.5%とほぼ半数を占めている。スクォッター地区は、一般に泥壁で囲まれており、その中は下水道、道路、電気設備は殆ど無く水道栓も一部の地区のみ、それも一地区に一箇所しか設置されていない。街灯は不法に電柱から引かれているのを見掛ける。下水設備が無い家庭から排出される下水と住宅周辺で放牧される豚の糞尿が混じって地区内を流れ、降雨の際はそれらが泥寧と化して悪臭を放つ。家庭には、便所が無く公衆便所も道路沿いの、しかも一部に限られており殆どの人が道路脇や空き地で用を足している⁽²⁵⁾。市当局によるスクォッター地区に便所を設置する計画は作成されたが実行に至っていない。

清掃夫の殆どが市当局、病院、金融機関、それに教育機関などで雇用されるが、この他に

中・上層カーストの個人家庭の清掃，屎尿処理がある。主として，この業務には清掃業をカースト職業とするスウィーパーカーストが従事するが，彼等の中でかなりの者は衣服仕立業，茶店，その他の小店舗の経営，洗濯業，リキシャ夫等に従事している。一方，清掃業にはドーム (Dom)⁽²⁶⁾ やイスラム教徒等も従事している。一般的に清掃夫は，スクォッター住民の中では比較的高い収入を得ているが，飲酒その他に浪費されてその日暮しの生活が普通といわれる。そして盗み，売春，闇酒づくりなど非道徳的な行為をする者が少なくない。

スクォッターとスラムの区別は，定義はともかく現実には不明確であるが1981年のセンサス報告によれば，ワーラーナシーのスラムは60ヶ所，その人口は86,767人で全市の12.2%を占める。しかし，この数字は，余りにも過少と見られ，市開発局資料による全人口の21.5%が実数に近いと考えられるが実態把握は困難である⁽²⁷⁾。同センサスによれば最大人口のスラムは，北サライアの13,000人，最小はヴァルナブリッジ (Varna Brij) の140人である。

インド主要都市のスラム人口比率 (1981) は四大都市のカルカッタ (35.4%)，ボンベイ (38.3%)，デリー (30.2%)，マドラス (31.9%) と，いずれも30%を上回る⁽²⁸⁾。これより高いスラム人口率を有するのはUP州のカンプール (Kanpur) の40.0%，同州の古都ラクノウ (Lucknow) の38.8%である。更に100万都市ではアーメダバード (Ahmedabad) の26.2%，ハイデラバード (21.3%) などがある。尚，センサスによればワーラーナシーでは開渠下水溝をもつものが42地区，下水溜まりへ流すもの18地区となっており，屎尿処理方法では，屋外便所18地区，便所無し42地区である。筆者の調査したスラムは4地区にすぎぬが，その一つにスンダーバギア (Sunder Baghia) を含む BHU 内のスラムがある。ここは大学のキャンパスの北西隅に立地する。就労者全員が大学の清掃夫である。中心部は改良された比較的良好な条件のスラムとなっている。その内部は2地区に分れ52のパッカ住宅からなっている。ここは水道，便所が設置されており，広い内庭にはブロックで囲まれた3部屋の水浴施設も持っている。そして内庭の一角には小学校がある。ここに居住するのは約400世帯で1世帯当たり6～7名で，総人口約2,500名である。全世帯のうちヒンドゥー教徒は約300世帯でヴァールミーキ (Balmiki, Valmiki) とヘラ (Hela) に属するスウィーパーカーストである。ここでは死者がでると市の火葬ガートの一つハリスチャンドラガート⁽²⁹⁾ で荼毘に付され，灰はガンガに流される。他の100世帯はイスラム教徒でシェイク (Sheikh) とジジィキィ (Siddiki) が多い。大学清掃夫の平均給与は，月額1,600ルピー，そのうち400ルピーが諸経費その他で引かれ1,200ルピーが支給されている。就業者は510名，うち男400名，女110名である。日用品は約1 km離れた大学正門近くの商店街で主として購入されるが，ときには2 km離れたより賑やかな商店街へ出向くこともある。嫁入り道具など高額のものは市中心街の商店で購入するようである。結婚式は内庭に天幕を張って挙式されるが，酷暑期には小学校のテラスが日陰になるのでここに変更される。このスラムは大学管理下にあるだけに比較的好条件である。現在，ここから北方向に200～300m離れた空地に3階建の新築アパートが大学により建設されているがここへは数百米離れたスンダーバギアから引っ越す予定である。そこは1971年が42世帯で1987年は89世帯と急増しているが，私の調査時点では63の掘立て小屋からなり，水道，便所もない悪条件のスラムであった。

市南部ランカー (Lanka) 近くアーシー川沿いにナグワチャマラウティ (Nagwa Chamarauti) スラムがある。川沿いの狭いくねった露地に煉瓦造りの住宅がへばり着くように立地している。ここは地名でわかるように住民全員がヒンドゥー教徒のチャマール (Chamar) カースト⁽³⁰⁾ である。全域が市有地で、住宅約500戸、約800世帯が住んでいる。人口は約8,000名でかなり大規模なスラムである。1世帯当たり10~12名で子供数が比較的多く、この点がこの地区の1つの問題点となっている。ここでは60才の Ram Deo 氏からの聞き取りの内容を記す。妻は63才、11名の子供を出産したと言う。彼は日雇いの洋裁士で、長男も日雇いで自転車店に勤務、他の息子は建築土工として働いている。このスラムは1790年にワーラーナシーのマハラジャ (Maharaja)⁽³¹⁾ により領国内の労働力と皮革工の需要を充たすため導入されたもので、最初の数名から次第にその数を増して今日に至っている。1958年にこのスラムは市の管理下に入った。就労者は1,100名である。この地区には清掃夫はいない。市最大企業のディーゼル機関車工場のほか生命保険会社、電気会社に勤務する者は月収2,000ルピー程稼ぐが、大多数は日雇い労働者として建設業の土工など肉体労働に従事し日収20~22ルピーの薄給で生活条件は極めて悪い。この地区の問題点として、飲料水の水源から遠いこと、便所、道路のないことをあげている。尚、ここはアーシー川がガンガに流入する直前、大きくU字形に流路が蛇行する位置にあり水はけが悪く、1979年のガンガ氾濫では水位が7~8mほど上昇し、そのときの水位跡が住宅の壁に残されている。しかしこの水害を契機に湛水防止の目的で分水路が建設された。

ダンパティドウルガクンド (Dampati Durgakund) スラムはモンキーテンプルとして観光名所の一つ、ドウルガ寺院の北東に位置する。周囲を煉瓦塀で囲まれた閉鎖性のスラムである。ここは、1890年頃から居住開始、今は約100戸、250世帯で1,800名程が生活している。多くは平屋で煉瓦、土壁の低い住宅で屋根は瓦葺きが多い。住民はすべてヒンドゥー教徒のスウィーパーである。市雇用の清掃夫は、月収1,600ルピーで、これは清掃夫の標準賃金である。一方、個人雇用の清掃夫は、月約1,000ルピーと若干低くなっている。便所は、各自から建設資金を拠出してつくられた。飲料水は、僅か一ヶ所の水道栓をスラム全員が使用しているが、給水の時間が午前4時~10時まで、午後は2時~5時までに制限されている。1992年3月に地区内にシバ神を祭る祠が建設され住民の手で花などが美しく飾られている。この建設には全住民が10~15ルピーを拠出しあってつくられた。このようにスラムでは、住民の結び付きが強固で、スラム内は自主的な運営がはかられている。

BHU 東部の田園地帯にチャマールの信仰が厚いラビ・ダース (Rave・Das) を祭る寺院が建っている。その脇にシールゴバルダンプル (Sir Gobardhanpur) スラムがある。住民すべてがヒンドゥー教徒のチャマールで約250戸、430世帯で2,800名の集落である。ここは、各自が独立家屋で、厚い土壁に囲まれ、窓のない狭い住宅が密集している。屋根は草葺きが多い。家の壁は数10cm程の厚さで室内はひんやりして暑気を避ける構造となっている。室内外は毎朝主婦が牛糞を用いてきれいに清掃している。家具は殆ど無いためかえってさっぱりしておりスラム住宅は不潔、不衛生であると言うのが必ずしも常識ではないことを知るのである。飲料水、洗濯などは5ヶ所の井戸が利用されそこは女性の井戸端会議で賑わう団欒の場となっている。近年、州政府により手動式の水道ポンプが設置された。他に、家庭用に個人でポンプを所有する家もある。周辺部は農地が広がっているが、この村は全く農業とは無関係である。750名の就業者の内リキシャ夫が410名 (54.7%) でもっと

も多い。他に日雇いの肉体労働190名 (25.3%) 建設業の土工100名 (13.3%) それに織物職人が30名, 衣服仕立師10名が数えられる。

IV スラムとスウィーパー

ワラーナシーのスラムの特色の一つにスウィーパー (清掃夫)⁽³²⁾ が他都市に比して多いことは既に述べたとおりである。ここではスウィーパーをとおしてスラム住人の生活を見ることにする。スウィーパーの代表としてバンギー (Bhangi) カーストがあがる。アイ

表3 ワラーナシーのカーストヒエラルキー
M. S. Chaterjee による
(ヒンドゥ教)

Brahmin (祭官)		
Bhumihar (バラモン自称, 地主階級)	Rajput (土族, 地主階級)	Thakur (農耕, 地主階級)
Vaishya (商人)	Khatti (商人)	Kayastha (書記)
Ahir (牧畜)	Kurmi (農耕)	
Khatik (肉屋, 八百屋)	Dhobi (洗濯夫)	
Pasi (椰子酒づくり)	Chamar (皮革工)	
Balmiki Chuhra Dhanuk Sweeper-Hela, Nangarchi, Rawat Dom		

(イスラム教)

Sayyid (司祭)	Sheikh (戦士)
Sweeper-Sheikh Mehter	

(シーク教)

Sardars (指導者)
Sweeper-Mazhabis

表4 Bhangi カーストの州による名称 Shyamalal による

州 名	名 称
西ベンガル	Hari, Hadi,
ウッタール プラデシュ	Valmiki, Dhanuk
マディヤ プラデシュ	Mehtar, Bhangi
アッサム	Mehtar, Bhangi
オリッサ	Mehtar, Bhangi, Valmiki, Madiga
ビハール	Mehtar
タミルナドゥ	Thoti
アンドラ プラデシュ	Madiga
パンジャブ	Mira, Lalbegis, Chuhra, Balashahi, Valmiki
マハラシュトラ	Ghare, Bhangi
グジャラート	Halalkhor, Hela, Barwashia
カルナタカ	Madiga
ケララ	Madiga
ラジャスタン	Bhangi, Mehtar, Chuhra, Valmiki
デリー	Bhangi, Valmiki

ザックス Isaacs (1964, 1970) によれば「最下層のなかでも最低の仕事は, し尿の汲取りであり, これは不可触中最底辺にいる人々が行うのが伝統であった。し尿汲取りをする清掃夫はバンギーとよばれ, バンギーは他の不可触民からも忌み嫌われている。1951年の国勢調査によると, インドの街路清掃人, 屋内掃除人, 下水掃除人の数は, 三百五十万人を数えその半数以上が都市で働いていた」⁽³³⁾。

バンギーは全インドで著名なカーストである。このバンギーに関する研究は, その多くがカースト研究, 村落研究のなかで若干触れられる場合が多く, 単独の研究はあまりないようである。ただ Shyamalal (1984, 1992) によるジョドプール (Jodhpur) の研究が注目される。彼は学会誌にも幾多の論考を発表している。他に Ratan (1960) のデリー, そしてワラーナシーでは Chaterjee (1981) の研究が代表的である。我が国では篠田隆 (1994) の研究があがるが, 三宅博之によるカ

ルカッタの都市廃棄物処理に関する研究のなかで作業員の多くはスラムに居住するビハール州出身のバンギーの多いことに触れている。

バンギーはサンスクリット語の Bhang (大麻中毒) に由来するというが, この名称はスウィーパーカーストの総称とも言える。各地域で多様な名称が用いられている。Russel & Hirala (1975) は

Chuhra とは (くず, 廃物), Hela は (糞の山), Mehter はペルシア語で「指導者」を意味する尊敬語としている。Balmiki は伝説上の聖者でスウィーパーの守護神であり, インドの二大叙事詩の一つラーマヤナ (Ramayana)⁽³⁴⁾ の作者とされている。

ワラーナシーの清掃夫の人口は1961年センサスでは2,467人と記されている。しかしあまりにも過少に過ぎるが実数は不明である。市の清掃夫はヒンドゥー教徒のバンギーだけでなく, チャマル, ドームそしてイスラム教徒のシェイク (Sheikh), シーク教徒のマザビス (Mazhabis) も従事するが, ヒンドゥー教徒の場合, 指定カーストに限られる。バンギーはUP州西部では Chuhra が多く東部では Hela が多い。ただワラーナシーでは Mehter を自称する者が多い。スウィーパーカーストの地位は低いですが Risley (1908, 1991) はカーストの最下位, Blunt (1931) は Chamar の上位, Bailey (1957) は籠つくりのすぐ下としているが, いずれも指定カーストのなかで低いランクづけがなされている。スウィーパーの生活はバンギープラ (Bhangipura) で実地調査を実施したチャタジー女史の研究を中心に考察する。

V バンギープラとスウィーパー

バンギープラはワラーナシー中央駅の南東部でツーリストバンガローにも近い, 代表的なスウィーパー居住区である。その名の示す通り「バンギーの町」である。但しここを一応スラムとしたが市の調査ではスラムに含まれていない。この地区に最初に定住したのはドームで, 地区の北寄りに掘っ立て小屋を建てて住み付いた。今は市当局により取り壊されて1956年にスウィーパーの居住区として再建されたものである。すべての住宅は内側を向いており, 両側には33戸が並んでいる。主としてスウィーパーが居住するがこのスウィーパーはツライハ (Turaiha) カーストが多い。5戸はこれも清掃人として働くドームである。他には肉屋を営業し成豚販売も営むカチーク (Khatik) が1戸含まれている。33戸

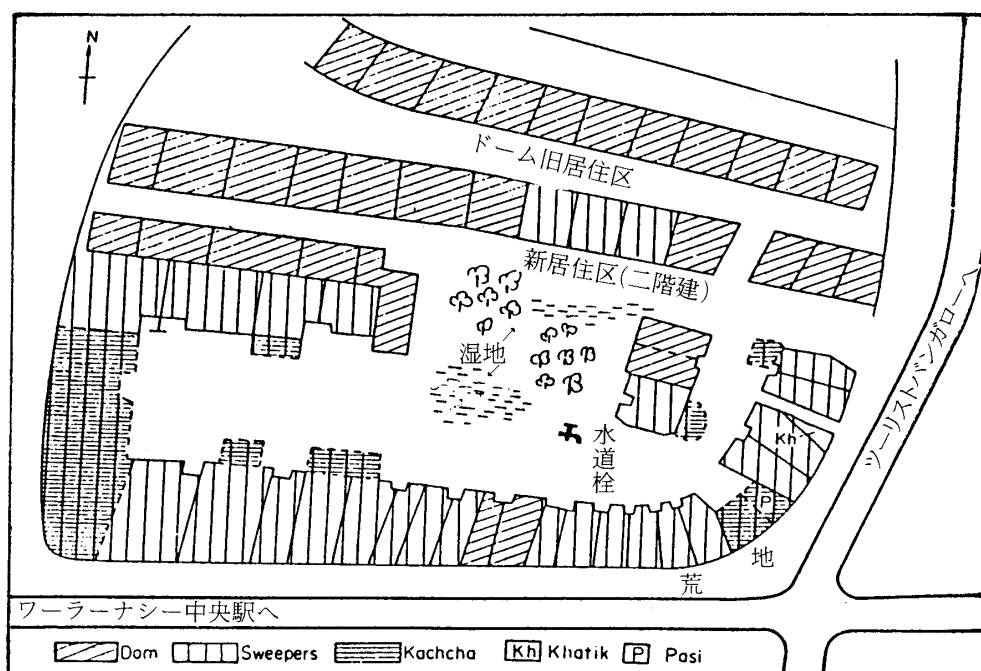


図3 Bhangipura の住宅 (1973年)

M. S. Chatterjeeによる

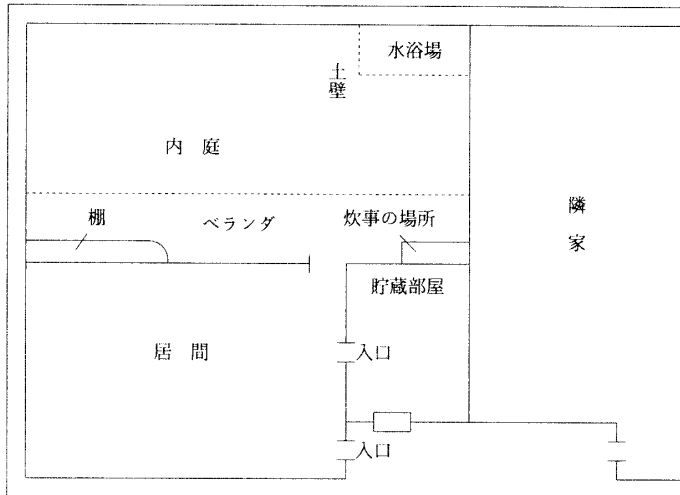


図4 市清掃夫の住宅平面図 M. S. Chaterjeeによる

のうち7戸がカッチャ住宅、他は全てパッカ住宅である。カチチャ住宅の1戸にはPasi⁽³⁵⁾の女性が1人住んでいる。北側は11戸の長屋でいずれも清掃夫として働くドームが居住している。この両者に挟まれた地区は最も新しい二階建住宅が並ぶが8戸のうち清掃夫は5名のみである。ここだけは各戸に水道栓が設置されている。住宅の一般的構造は部屋1つ、それに貯蔵庫が付設されている。い

ずれも前にベランダがあり暑い季節には男性はここで寝起きする場となり近隣の人達との社交の場ともなっている。台所は室内でなくベランダの一隅におかれている。その理由は悪魔の目を恐れるためという。この住宅様式は市雇用清掃夫の住宅に共通するものである。

(スウィーパーの業務) 元来、農村部では清掃の仕事は少なく、村の整備係、連絡係の他に農業労働者、籠づくり、楽師⁽³⁶⁾などで生計をたてる者が多い。しかし、都市では本来のカースト職種としての清掃業務に従事する者が多い。市当局、鉄道、大学その他の公的機関や、銀行、生命保険会社などの金融機関その他の民間企業での需要も多い。それの中・上層カーストの家庭における清掃、尿尿処理など働く場が多いためである。ここでは比較的、業務内容が明確な市の清掃業務を中心に概観する。

清掃業務は原則的に男女同一労働、同一賃金となっている。市清掃夫の3分の2は女性が占めている。労働時間は7時間、夏期は午前5時から9時まで、午後は3時から6時まで、冬季は午前が7時から11時までに変更される。街路の清掃、家庭から排出されるゴミの収集、公衆便所の清掃などが主な業務である。他都市との相違点としては本市の公衆便所は水洗化されており、尿尿運搬の必要がないことである。各ワード(Ward)⁽³⁷⁾毎に1名のダローガ(daroga)⁽³⁸⁾またはハビルダー(havilder)が清掃夫の監督として一切の業務が一任されている。彼等の月収は250ルピーでこの役職は清掃夫は就任できない。その下にはジェマダール(Jemadar)⁽³⁹⁾が各5名いて1人で清掃夫20~25名を自転車で回って直接指揮をとっている。その範囲は1,200平方フィート(約112㎡)前後となっている。この職務はすべて男性で、清掃夫のなかからも抜擢される。彼等は月収150ルピーで清掃夫よりも高い。清掃夫は原則として4名1組となって職務を遂行する。

市民は家庭ゴミを直接道路に放棄している。清掃夫はこれを集めて籠に入れて頭にのせるか二輪の手押車で牛車の待つ地点まで運んで車に載せる。そしてトラックの駐車場まで順次運びトラックで市外の処理場へ輸送する。牛車、トラックの運転手は男性に限られる。庶民の多くは便所を持たず、早朝、空地や道路脇で用を足すが、清掃夫はこの処理はしないことになっている。

早朝、ガンガ沿いのガートでは日の出とともに沐浴せんとする多数のヒンドゥー教徒、それに観光客で賑わいをみせる。ガートの背後は寺院や宮殿、ダルマシャラ(Dharumasha-

la)⁽⁴⁰⁾ に上層カースト、商人の住宅が狭い迷路状の路地横に立ち並んでいる。この附近での清掃は参拝者が清掃夫と接触することを嫌うため作業は沐浴の時間帯が避けられる。そして、人出の少なくなった時刻を待ってその業務にとりかからねばならない。また狭い路地のため不意の接触を避けるために大声をあげて作業する。もし不幸にも誰かが清掃夫に接触した時はそのままでは沐浴できず、“浄め”⁽⁴¹⁾ が必要となるのである。

(清掃業の組織) 各カーストは自らの自治組織としてカーストパンチャーヤット (caste panchyat)⁽⁴²⁾ をもっている。ワラーナシーのスウィーパーは主として7カーストからなるが、彼等はUP州各地からの流入者が多いためパンチャーヤットは機能していないようである。それに代ってヴァールミーキ協会 (Balmiki Sangh) がスウィーパーの全国組織として結成されている。その目的はスウィーパーの地位向上にあるが、ヴァールミーキカーストのパンチャーヤットの性格を有するとの見解もある。協会は1941年にハドリ プラサド ヴァールミーキ アーナンド (Sadri Prasad Balmiki Anand) により結成されて政府の認可を受けている。一応ヒンドゥー教徒のスウィーパーは協会支部の会員となっている。組織は1940、50年代にはスウィーパーの広範な支持を受けていたが、現在は活動が鈍り消滅寸前となっている。それに代って1930年に設立された公衆衛生従業者組合 (Sanitation Workers Union) が勢いを得てきている。後者は市清掃夫全員がその支部に所属している。その組織は市内の各ワード毎に5名の代表を選出しその会合が月1回開催されている。委員は全構成員による選挙で選出され、組合費は年間3ルピーを徴収している。ヴァールミーキ協会、公衆衛生従業者組合の両組織は1954年に協力して寺院や食堂への指定カーストの立ち入り⁽⁴³⁾ を扇動してこれに成功した。特に著名なヴィシュヴァナート (Vishvanath) 寺院⁽⁴⁴⁾ にも1956年に拝礼をはたしている。しかし、今もタークル (Thakur)⁽⁴⁵⁾ やチョウドリ (Choudhry)⁽⁴⁶⁾ カーストは自己の守る小寺院への指定カースト立ち入りを拒否している。協会の衰退と従業者協会の発展の原因は活動方法に一因があるといえる。前者はガンディー方式といえる伝統的な運営、例えばハンガーストライキにより他カーストとの共食⁽⁴⁷⁾ などを推進してカーストの地位向上を図らんとするのに対して後者は清掃夫の待遇改善、例えば労働条件の改善、生活の向上などを要求しストライキなど積極的手段に訴え、これまでに一応の成果を挙げてきたことが支持される原因となったようである。1950年には清掃夫の賃金が引き上げられ、更に1960年にも賃上げを獲得した。この時、市側はカンプールなどからスト破りを目的に清掃夫が集められたが、彼等同志の争いが警察沙汰となり結局スト破りは失敗して賃上げは認められ、月額40ルピーから110ルピーになった。その他に活動の成果として労働時間が14時間から7時間に半減され、更に2週間毎に半日、年間13日の祭礼休暇が有給で認められた。女性は42日間の産後の有給休暇、但しこれは第三児出産までに限られている。病気による6ヶ月の賃金保障と全勤務期間を通じて12ヶ月の療養休暇が与えられているが1回は最大1月半の休暇をとることができる。市清掃夫には衣服が年1度支給され冬は75ルピー夏は36ルピーの実質的価値がある。他に廉価の住宅が貸与され、400ルピーまで無利息でローンが利用できる。尚、800戸の住宅が清掃夫のため建設された。生活条件の改善要求として上水道、排・下水施設や便所などがあがっている。バンギープラで200名の住民にとり利用できるのは僅か2ヶ所の水道で排・下水施設は全く設置されていないし電気も利用できないといった実情からきている。市側は全戸に電気設備、4戸に1ヶ所の水道栓設置を約束したが4年を経ても未着

表5 職業別収入(1カ月) 1973年 M. S. Chatterjeeによる

職 業	月収(ルピー)	月収平均(ルピー)
個人家庭使用人	50(食事付)	100(食事 60ルピー相当)
ホテル給仕	100(食事付)	100(食事 60ルピー相当)
日雇い土工	150~300	160
リキシャ夫	100~255	175
年少者店員	150~200	200
工場労働者	150~400	200
清 掃 夫	200~300	200

工である。

(清掃夫の待遇) インドでは下層カーストになるほど一般に生活水準は低い。しかし、清掃夫は、そのなかでは相対的に給料は高く、かつその地位は安定している。1972年の基本賃金は月額103ルピー、それに毎年1ルピーずつ

実質賃金の目減り保障が付加される。但し、これは7年間に限定されている。1992年には月額1,600ルピーで20年間で14~15倍に上昇している。当然物価上昇がかなりひどいが、これには実質的な上昇分は考慮されていない。彼等は都合でいったん離職しても希望すれば1~2ヶ月の猶予があれば簡単に復職できるようである。なお、民間企業の清掃夫の待遇は、市より若干高く160~200ルピーである。ここでは、女性は少ない。さらに中・上層カーストの家庭では、清掃、汚物処理は、個人的に契約した清掃夫に依託する。この仕事は、女性にはほぼ限られるがその理由は、婦人が男性清掃夫に接することを嫌うためである。料金は一戸当たり月に2~4ルピーで、清掃夫はこれを複数担当するがその多くは公的、私的機関での清掃業務の余暇を利用している。他に、個人家庭での結婚式その他の儀式祭礼の際は特別の謝礼として衣料が支給され余った食物が与えられる。

(その他の業務) 殆どのスウィーパーは、本来の世襲職業として清掃業の他に、各種手段で収入増をはかっている。バンギープラでは、46名の既婚男性の内、5名は鉄道員、他に1名はチョーキダール(chowkidar)⁽⁴⁸⁾として月140ルピーを得ている。スウィーパーの副業として代表的なものに豚の飼育がある。当然とはいえイスラム教徒は、養豚には全く従事していない。バンギープラでも内庭で放牧され夜間は地区内に放し飼いされている。他に、都市内の空き地に生える草、道路に放棄された生ごみ、糞を食べさせるのはスウィーパーの権利として認められている。豚の飼育方法は、飼料として豆のさや殻や残飯が与えられる他に勝手に地区内から外部にも徘徊して餌をあさるため殆ど人手がかからず飼育コストが安いためにスラム内で広く普及しているのである。成豚は、近所のカティークの他にカティーク委員会の仲買人が毎週バンギープラを訪問してくるので彼等に売却している。豚の地方市場は、市内のコルワ(Kholwa)にあり、ここには肉屋が集まっている。ここから大市場であるカルカッタへ鉄道便で出荷されている。市内での豚の消費は下層カーストに限られ他にはホテルで外国人観光客の食卓に供される。市スウィーパーの最高実力者Chota氏はこの豚の飼育で蓄財した成功者である。彼は50~60頭を自ら飼育する他にカンプールやファティプール(Fatehpur)地域から成豚を安価で購入し鉄道勤務の息子2人が年数回支給されるフリーパス等を利用してカルカッタに出荷している。その他には、市内のナイ・パケリ(Nai Pakeri)に7戸、スーニア(Sunia)に2戸の借家を所有しておりそれを月5~25ルピーで貸している。さらに、月額10%の利子で金貸業も営んでいる。一般にスウィーパーの生活は、その日暮して貯金などをしないため結婚、病気その他金が必要な時に金融機関からは相手にされないこともあってこうした個人金融に依存することになる。彼は、自らの成功の理由として苛酷な労働に耐え、質素な暮らしをして浪費を避ける、例えば好きな酒もけっして深酒しないと云った自己抑制に務めた結果と云っている。豚の他に山羊や鶏も飼われている。それは主として子供が世話をする。山羊の乳は育児用にも

利用される。結婚式や儀式の際に50～100ルピーで売却する。飼料代は、月8ルピー程で、純益は山羊1頭50～60ルピーほどあがる。

バンギプラでは3名の男性、1名の少女が籠づくりに従事している。それに藁細工、扇子、玩具、風選とうみ等周辺の人々の需要がある商品を製作しているが市内で行商もされている。収入は月20～30ルピーといわれる。自転車の所有者で1時間20パイサ(1/5ルピー)で賃貸して僅かな収入を得る者もいる。一部の世帯では、ベランダを利用して小店舗を経営するがビスケット、タバコ、ケロシン油、その他を扱っている雑貨店、他に床屋、八百屋、産婆もいるが、他地域からも行商が訪れる。バンギープラでは、日常生活に必要なものは、一応地区内で求められるようになっている。さらに、1名の男が太鼓たたきの楽師でバンドの一員として一晩5ルピー程を得ている。さらに、スウィーパーは、街路の牛糞を収集する権利を持ち乾燥させて自家用燃料に利用する他に販売もされている。

(スウィーパーの家計収支) バンギープラでは1世帯当たり平均2.75人が就労し月間平均収入は300～400ルピーである。33世帯のうち8世帯は、400～500ルピー、2世帯が500～600ルピー、そして600ルピー以上は1世帯に限られる。他に、

家畜販売収入が月額9ルピー程となっている。少年少女も食堂その他で働き収入を得ている者が多い。ここでバンギープラのうち、2世帯の家計収支を取上げる。Moti家は市清掃夫として夫婦共稼ぎ、10才までの子供が2名の4人家族である。夫は副業として夜間楽師をして稼いでいる。妻は勤務時間外を利用して個人家庭の清掃夫として働いている。月収は夫婦合わせて273ルピーである。この他に一定した収入にはならぬが牛糞燃料(gobal)の販売、豚の飼料づくり、衣服縫製などで若干収入をえている。支出面では、ローン返済、乾物、酒代の3品目で支出の大部分を占めている。ここで問題となる

表6 2世帯の家計収支(1ヶ月) M. S. Chaterjeeによる

Moti家 家族構成(夫婦, 子供4名 計6名)			
(収入)		(支出)	
市清掃夫(夫)	108 ^{ルピー}	肉	20 ^{ルピー}
"(妻)	105	乾物	80
個人家庭の清掃(妻)	30	野菜	15
楽師(夫)	20	ケロシン油	3
豚飼養	10	燃料	15
合計	273	家賃	4
		ローン利子支払	50
		わいろ	5
		雑貨	11
		酒	70
		合計	273
Devideen家 家族構成(夫婦, 息子夫婦, 娘, 孫4名 計9名)			
(収入)		(支出)	
市清掃夫(夫)	110 ^{ルピー}	肉	50 ^{ルピー}
"(妻)	110	乾物	200
"(息子)	105	野菜	45
"(息子の妻)	103	ケロシン油	5
"(娘)	103	燃料	20
		ローン利子支払	140
個人家庭清掃(妻)	35	わいろチップ	2
豚飼養	10	家賃	4
合計	576	雑貨	30
		酒	30
		合計	576

のは夫の酒代にかなりが消えていることである。Devideen家は夫婦に息子夫婦、娘と5人が清掃夫として働き、他に妻が個人家庭の清掃夫として働くほか豚の飼育を合わせて月額576ルピーの収入をえているが、扶養家族は子供4名、支出では乾物購入とローンの利子の支払いで60%を占める。両家共に貯金がゼロで子弟の教育費のない点が問題である。男だけは若干小遣いを貰っているという。

(スウィーパーと教育) インド政府は指定カーストの社会的・経済的地位の向上を図る幾多の施策をこれまでに実施してきた。そのうち基礎的条件として特に教育水準の向上に務めてきた。そしてその成果は着実にあがってはいる。しかし現実には指定カーストの圧

倒的多数は未だ十分な教育の恩恵を受けていない。バンギープラでも例外ではなく、読み書きできる成人男子は僅か6名で、大学卒はいない。市内9スラムの203世帯では成人男子の51名が小学5年以上の就労者、識字率は19.4%にすぎない。スウィーパーの指導者Chota氏も全く読み書き出来ぬことに代表されるように特に高齢者は全く教育を受けていない。男性より酷いのは女性でバンギープラでは既婚女性で小学6年を終了したのは僅か1名、しかも彼女は結婚してここを離れている。つまり現在、バンギープラの住民ではゼロである。

政府の指定カースト保護政策として特に重点がおかれたのは教育面の優遇⁽⁴⁹⁾、そして官職への優遇⁽⁵⁰⁾、それに選挙制度上の優遇⁽⁵¹⁾である。UP州政府では18%の公務員枠が指定カーストに留保されているが現実にはその僅か25%だけがその恩恵を受けているにすぎない。これは一つに彼等の教育水準の低さに原因がある。

先述のスラム地区でも中学2年終了の2名が熟練職人と郵便配達夫、高校1年終了者1名が事務員、高卒の1名がディーゼル機関車工場の事務員として勤務している。他に高校1年終了の1名が研究所の案内係を勤めている。このようにある程度学歴があればスウィーパー生活を脱出してより高収入の職業に転職する機会が得られるはずである。しかし、清掃業務は低賃金とはいえ指定カーストの中では相対的に高い収入があり、それに雇用が安定しているために今の生活に安住し積極的に教育水準の向上への熱意が生じてこない。口先では教育の大切さ、特に子弟教育への関心を示すが、実態が伴っていない。子弟の就学状況を示すデータはないが、一応小学校に入学しても大多数が2～3学年で脱落している。その理由として、学校が遠すぎる。学費が年間20～30ルピーかかることをあげるが、中学以上は月額12ルピーの奨学金が指定カーストの子弟に与えられ、高校では月29ルピーに増額される。しかし、8才の少年で、食堂で働き20～30ルピーを稼ぐ者もいる。12才の少年の中に食堂のボーイとして月60ルピーの収入を得ている者もいる。更に10才代の子供の中で、月100～150ルピーと大人並みの稼ぎ手もいる。州政府は、18才以下の就労を禁止しているが、現実にはそれ以下でも容認されており、実効はあがっていない。このように子供も家計の一翼を担っており、家では水汲み、買物、食器洗い、家畜の世話をし、少女は弟妹の子守りをし、両親の帰宅前に夕食の準備をすませたりもする。これらが親の子弟教育への関心を失わせるのである。

バンギープラでは昼間忙しい子供に対する私塾が開かれている。それは近隣に住むHelaカーストの男が教師として1日1時間、若干の学費を徴収して15名の子弟を教育している。尚、バンギープラではごく一部にすぎぬとはいえ現状の改善を目指す動きも起っている。教育により転職の機会を得ることができスラム脱出を図る動きである。そこでスンダーバギアに住み自ら大学清掃夫として働くイスラム教徒の男により成人にたいする夜間学級が開設されている。

VI おわりに

スラム環境の劣悪な状況にたいして基本的に改善が進んでいない。しかしバンギープラをはじめスウィーパースラムの住民生活はかなり大きな変化が生じていることも事実である。スウィーパーは原則として夫婦共稼ぎで男女間の経済格差が小さいため性的差別は少

なく女性の家庭内での地位は高い。離婚、再婚は自由⁽⁵²⁾であり未亡人も普通の生活を送っており、男性とも自由に会話している⁽⁵³⁾。これは中・上層カーストのなかにパルダ (parda) 制⁽⁵⁴⁾と呼ばれる女性隔離の社会的慣習が残っているのにたいしてスウィーパー社会では女性が家を出て外世界で働く自由をもっている。ただ娯楽面、例えばインド最大の大衆娯楽である映画観賞などでは男性に比して女性の回数をはるかに少ないこと⁽⁵⁵⁾、小遣いは女性には与えられていないといった点で多少男女差が認められる。

バンギープラのスウィーパーは同地区にすむ他カーストであるカティーク、ドーム、それにイスラム教徒ともかなり親密な交遊関係をもっている。例えば結婚式などでは地区内の全員が招待されている。

清掃夫は全員指定カーストに属しているがその中でもスウィーパーカーストの地位は極めて低いとみられている。それはスウィーパーの殆どが他カーストから食物を受け取ることが出来る⁽⁵⁶⁾ということからもわかる。ワラーナシーは聖地だけにカースト意識が強い。そのため不浄な存在としての指定カースト排除の気風が他の北インド都市に比して強いといわれている。スウィーパーに強い影響力をもつ Chota 氏はそういった気風に敏感で今でも自らはヒンドゥー寺院に立ち入らず拝礼は寺院外から手を合せる⁽⁵⁷⁾といった節度ある態度をとっている。しかし1947年のインド独立後は自由平等の思想がインド社会にも次第に浸透し、憲法でも不可触民制の廃止が規定されており⁽⁵⁸⁾次第に指定カーストの意識にも変革が生じている。1956年にワラーナシーではスウィーパーが警官護衛のもとに最も重要なヒンドゥー寺院であるヴィシュバナート寺院になんらカーストヒンドゥー⁽⁵⁹⁾の暴力的抵抗を受けること無く平穩裡に入場し礼拝したことに象徴的に示されている。ただこのときは、Swami Karpatriji 氏⁽⁶⁰⁾の指導下に別に新ヴィシュバナート寺院を建立し、内部には司祭のみでバラモンといえども立ち入りが禁止される方式をとることで自己防衛を図っている。

ワラーナシーの指定カーストの82%を占めるチャマールではサンスクリット化 (Sanskritization)⁽⁶¹⁾により自己のカースト地位の上昇を目指す動きが生じている。ただスウィーパーはこの動きに無関心なようである。カースト意識が依然強固に存在するとはいえ社会の変動に伴いスウィーパーも市民のカースト差別の意識が徐々にではあるが変化してきていると感じている。BHUでスウィーパーの監督をしている Prasad は「ここではバラモンとも食事を共に取ることが出来る。農村ではとても考えられないことだろう」と。更に「町ではスウィーパーは勤務中または汚れた衣服着用以外は食堂でもどこでも自由に食事ができる」「かつてはカーストヒンドゥー⁽⁶²⁾はスウィーパーズラムに入ることを恐れていたが今は所用があればはいつてくるようになった」といっている。その言葉にも変化の一端を知ることが出来るのである。

参 考 文 献

- 北川建次 (1974): ガンジス中下流平野における核心都市, 米倉二郎編, インド集落の変貌, 古今書院
 篠田隆 (1994): 西部インドの屎尿処理とバンギー, アジア廁考, 大野盛雄編, 勁草書房,
 久山純弘 (1987): 第三世界の都市爆発—居住問題を中心に, 岩波ブックレット
 新津晃一編 (1989): 現代アジアのスラム, 明石書店

- 二木敏篤 (1988): インドの都市問題(1) スラムと路上居住者を中心として, 兵庫地理第32号
- 二木敏篤 (1989): インドの都市問題(2) 中都市ビジャワダのスラム, 兵庫地理第34号
- 三宅博之 (1988): 第三世界における都市廃棄物処理の現状と問題点, アジア経済29巻11号
- 山折哲雄 (1992): 聖と俗のインド, 有学書林
- Bailey, F. G. (1957): *Caste and the Economic Frontier*, Manchester Univ. Press
- Blunt, E. A. (1931): *The Caste System of North India*, Oxford Univ. Press
- Chatterjee, M. S. (1981): *Reversible Sex Roles, The Special Case of Benares Sweeper*, Pergamon Press
- Datta, V. N. (1988): *Sati, Widow Burning in India*, Monahar N. Delhi
- Diana, L Eck. (1983): *Banaras City of Light*, Routledge and Kegan Paul, London
- Dube, K. K. (1968): *Tourism and Pilgrimage in Varanasi*, The National Geographical Journal of India (NGJI と略称) Vol. 14, 2-3 Varanasi
- Dube, K. K. (1976): *Use and Misuse of the KAVAL towns*, NGJI Press Varanasi
- Dwyer, D. J. (1975): *People and Housing in Third World Cities Perspective on the Problem of Spontaneous Settlement*, Longman Groupe Ltd. N. York.
- (邦訳) 金坂清則訳 (1984): *第三世界の都市と住宅—自然発生的集落の見通し*, 地人書房
- Ford, J. (1939): *Slum and Housing, History, Condition, Policy*, Harvard Press Cambridge
- Govt. of India (1986): *Census of India 1981. District Handbook Varanasi*, Govt. Press Allhabad
- Havell, E. B. (1933): *Benares Sacred City*, Thaker Spinkl. Co. Ltd. Calcatta
- Isaacs, H. R. (1964): *India's Ex-Untouchable* (邦訳) 我妻洋, 佐々木譲訳 (1970): *神の子ら 忘れられた差別社会*, 新潮選書
- Kayastha, S. L. and S. N. Singh (1977): *A Study of Preferenses and Behaviour Pattern of Tourism in Varanasi*, NGJI Vol. 23, 3-4
- Kayastha. S. L. and S. N. Singh (1983): *Tourism in Varanasi City, A Functional Analysis* NGJI Vol. 29, 1-2
- Kumar, N. (1987): *The Mazars of Banaras, A New Perspective on the Cities Sacred Geography*, NGJI Vol. 33, 3
- Ratan, Ram (1960): *The Changing Religion of Bhangis of Delhi*, Vidyarthi (ed.): *Aspects of Region in Indian Society*, Ramnath Kedarnath, Meerut
- Risley, H. (1905): *The People of India*, Munshiram Manoharlal Pub. N. Deih
- Rusell, R. V. and Hiralal (1975): *Tribes and Castes of Central Provinces of India* Vol. IV Cosmo Pub. Delhi
- Singh, O. et al (1988): *India's Urban Environment Pollutions, Perception and Management*, Tara Book Agency, Varanasi
- Singh, Rana P. B. (1980): *Toward Mith, Cosmos, Space and Mandala in India*, NGJI Vol. 33-3
- Singh, Rana P. B. (1986): *Banaras Literacy Images and Religions Landscape*. IWG-GBS
- Singh, Rana P. B. (1987): *The Pilgrimage Mandala of Varanasi/Kasi, A Study in Sacred Geography*, NGJI Vol. 33-4
- Singh, Rana P. B. (1988): *The Image of Varanasi: Sacrality and Perceptual World in Hindu Codification*, NGJI 51-1
- Singh, Rana P. B. (1982): *The Socio-Cultural Space of Varanasi, Ritual Space in India, Study in Archtectural Anthropolgy* (ed.) Preper, J. London
- Singh, Rana P. B. (ed.) (1993): *Banaras, Cosmic, Order, Sacred City, Hindu Tradition*, Tara

Book Agency, Varanasi

- Singh, R. L. (1955): Banaras, A Study in Urban Geography, Nand Kishae and Sdns, Varanasi
- Singh, R. L. (1974): Social Factors in the Morophgenesis of Varanasi, IGU Sumposium, Simposium No. 15, Varanasi
- Singh, R. L. and Rana P. B. Singh (1980): Cognizing Urban Landscape of Varanasi, A Note on Cultural Space of Varanasi, A Note on Cultural Synthesis NGJI Vol. 26-3, 4
- Sharma, A. (1988): Sati, Historical and Phenomenological Essays, National Banarasidass N. Delhi
- Shyamlal (1992): The Bhangi, A Sweeper Caste, Its Socio-Economic Portraits, Popular Prakashan, Bombay
- United Nation (1952): Urban Policys Document ST/SCA/9, UN Secretariat, N. York

脚 注

- (1) 新津晃一編 (1989) P. 16
- (2) 発展途上国都市にみられる産業化に伴う労働人口以上に都市人口が増大すること。
- (3) Banaras の英語用法。
- (4) カシーは王国名, その首都がワーラーナシーといわれる。
- (5) ガンガの流路の曲線が市の主宰神シヴァの頭部の三日月を象徴する。シヴァ神はヒンドゥー教の三大神の一人, アーリア以前の土着神といわれる。
- (6) インド人の34.2%, 外国人では71%が舟上からの遊覧を楽しんでいる (Kayastha&Singh, 1977)。P. 146
- (7) Dube (1976) によれば大規模工業ではワーラーナシーは全労働人口の13.5%で5市中最下位, 家内工業では24.6%で圧倒的に第1位となっている。P. 69
- (8) Ford (1939) による。P. 11
- (9) UN (1952) による。P. 200
- (10) Dwyer (1975) によれば「スクォッターの言葉には集落の抱える問題の解決のためにならぬことが多い。つまり法律に不利と言う見地から自然発生的集落の語を用いる」PP. 16~17
- (11) Singh and Souza (1980) P. 5
- (12) 前掲 (7) P. 45
- (13) 久山純弘 (1987) によれば「スラムないし不法占拠居住者数に関しては, 定義上の問題とかデータの問題等もあり, 正確な統計を得ることはむずかしい。」p. 20
- (14) cantonment とは英植民地下での英軍の兵営地区をさす。
- (15) Scheduled caste とは, 前不可触民 (ex-untouchable), 憲法では不可触民制は廃止され, 彼等弱者を保護する目的でこの名称が用いられている。
- (16) ビーリー (biri) と呼ばれる安タバコ, 乾燥したタバコに似た葉で刻みタバコを包んで巻いたもの, 今一つはパーンと呼ばれるキンマの葉の裏側に阿仙葉の水溶液と共に水に浸した消石灰を塗り, 細かく砕いたびんろうじゅの実を包んだ一種のタバコを指す。
- (17) BHU 地理学教授 Onker Singh 氏の教示による。
- (18) スクォッター (不法占拠) 集落とは, 公有地, 民有地を無断で占拠して掘っ建て小屋を建てて居住するもの。
- (19) Singh et al. (1988) pp. 50~57
- (20) Bari Maldahia はワーラーナシー駅の南東部に立地する。

- (21) Piari は Chawk と呼ばれる市中心部にある。
- (22) Bari Gaibi は市南部 Kamchcha にある。
- (23) pukka は家屋材料として石、コンクリート、焼成煉瓦、瓦などで建てられた耐久性のある住宅
- (24) Katcha は土、草、トタン、布等を材料としてつくられた非耐久性の住宅。
- (25) 豚などが待ちかまえて食べあさるので不潔さは一般に残らない。
- (26) Dom ビハール州を中心に住む低カースト、汚物、清掃に従事する指定カースト。
- (27) 注 (13)
- (28) UNICEF 資料、表 1 と比較して大差が生じている。
- (29) ghat とは階段の意、ガンガで沐浴する信者はこのガートを降りて水浴する。ガートは84あり、5キロにわたり続いている。火葬ガートは上流の Harischandra Ghat と下流の Manikarnika Ghat の 2 箇所ある。特に後者は最重要 ghat である。
- (30) Chamar は指定カーストでも最下層とされ皮革を扱うカーストである。
- (31) Maharaja は大王の意、インドの支配階級、英領時代の藩王を指す。
- (32) Sweeper は清掃を世襲職業としたカースト、単に清掃夫の意にも用いられるが本稿ではスウィーパーをカースト名、清掃夫は職業名として区別する。
- (33) Isaacs (1964) 邦訳 p. 80
- (34) Ramayana は Mahabharata と並ぶインドの国民的大叙事詩、東南アジアにも強い影響をあたえ我が国にも漢訳仏典中の仏教説話として「宝物集」の中に紹介されている。
- (35) Pasi は指定カーストに属し猟師、椰子酒づくりを業とする。
- (36) スウィーパーの墮落した仕事とみなされる。
- (37) ward 行政区のこと。
- (38) ヒンディー語で監視長のこと。
- (39) ヒンディー語で小隊長、掃除人の意。
- (40) Dharmashala は信者が巡礼で宿泊する公営無料宿泊所、ワーラーナシー宿泊インド人の43.4% (1979~80) がここを利用する。Kayastha (1983) p. 10
- (41) ヒンドゥー教では浄・不浄思想が社会の秩序の原理で、すべての存在は浄・不浄の観点から分類される。汚れは直接の接触のみか、間接的接触でも伝染すると信じられてきた。下層カーストとの接触は、そのもつ汚れが自己に伝染する。その接触を完全に回避することができぬため浄化儀礼が発達してきた。
- (42) panchyat 各カーストは結婚、食事、職業その他で独自の宗教的、社会的慣行で結ばれている。その慣行に違反した者は Caste panchyat (長老会議) やカースト構成全員の集会 (sava) の決定で制裁が加えられる。
- (43) インド憲法第15条(2) 公民は宗教、カースト、性、出生地、又はそれらのいずれかの理由のみをもって (a) 店舗、公衆食堂、旅館及び公衆遊戯場への立ち入り……。その他の差別が禁止されている。
- (44) 黄金寺院と呼ばれるワーラーナシーで最重要寺院の一つ、Vishvanath はシヴァ神の異名。
- (45) Thakur は地主カースト。
- (46) Chaudhuory とは首長の意。上層カースト。
- (47) ヒンドゥー教徒の食事は一種の儀礼とされ、原則的に他カーストの者と一緒に食事をすることを禁じられている。
- (48) 夜警の意。
- (49) 州政府により高校まで奨学金供与、授業料、試験料の免除、教科書、ノートが支給される。中央政府は高卒以上の奨学金や海外留学資金を提供している。
- (50) すべての官職、国家公務員、地方公務員、公営企業にたいし人口比に応じて指定カーストに職場が保

留されている。

- (51) 中央、地方議会の全議席の人口比に応じた数の議席が指定カーストに保留されている。
- (52) インド社会では慣習上離婚できず、未亡人の再婚は社会的身分を失うこととされた。未亡人は幽鬼にとりつかれた不浄の存在として虐待され、何の権利もなく日常生活も極度に制限された。そのため Sati、つまり死んだ夫の火葬のさいに自らも共に焼かれ殉死することもあった (Datt 1988, Sharma 1988)
- (53) 未亡人の再婚は1856年のヒンドゥー法で認められたが実効なく、1955年のヒンドゥー婚姻法の制定で一応認められたが現実には極めて困難である。
- (54) parda とはペルシア語で「幕」の意、女性を家族以外の男性の目から遮断する意味の社会的慣習をさす。上層カーストによく見られる。
- (55) バンゴープラでは全く映画館へ行ったことがない者は男で0%、女は43.4%、男では年に数回が最も多いが、女はゼロである。
- (56) カーストランクが自己より低いとみなす場合、彼等が調理した食事はそのカースト員の不浄性が食物に伝わるとされそれを食べればカーストの不浄が自分に伝わるため禁忌される。つまり自分よりカーストランクの上位からは食物を受け取ることが出来るが下位の者からは受け取らない。
- (57) 前掲 (41) 指定カーストは不浄の存在としてヒンドゥー寺院への立ち入りを認められなかった。
- (58) 「不可触賤民制」は廃止され、そのような慣行はいかなる形式においても禁止される。「不可触賤民制」に起因する無能力を強制することは法律によって刑罰を科しうる犯罪とする。(憲法第17条)しかし憲法でカースト制度を禁止してはいない。
- (59) カーストヒンドゥーとは指定カースト以外の一般のヒンドゥー教徒をさす。
- (60) Karpatriji はインドの極右政党で伝統的カースト的秩序を保守せんとする Ram Rajya Panishad の創始者である。
- (61) サンスクリット化とはインドの社会学者 Srinivas (1962) により提唱された。浄性の高いとされるバラモンの慣行を採用することでカーストの社会ランクを上昇せんとする動き、これに対応する語として西欧化 Westernization がある。これは上層カーストの生活を西歐式の生活に変化させることをいう。

Slums and Sweepers of Sacred City Varanasi

Tosiatsu Niki

The phenomenon of slum has come to be regarded as a major problem of urbanization while no Indian city is free from slums, the problem appears to be more acute in metropolitan cities. Report of Varanasi Development Authority (VDA) about 21.5 per cent of the total population lives in 72 slum localities in the periphery of the main city.

According to an estimate VDA about 85 per cent of the slum population lacks basic sanitary and water supply facility, most of the slum dwellers are employed as sweeper, weaver, footpath sellers and in biri making, construction etc. as daily wage earners and so on.

A specific character of slum dwellers of Varanasi, many of the workers are employed as sweepers. The increasing demand for sweepers since the 1930s has led to the migration of many persons of low caste especially Scheduled caste from the rural areas. The expanding city needed more sweepers. In Varanasi municipal sweepers clean streets and public lavatories. Since both husbands and wives work and earn equal wages which are fixed by the Municipality, sweepers are among the better paid of the low caste groups, poor though they are. Sweeper's women have formal economic roles in the organised sector of the economy. They earn as much, or more, as the men and they do the same work. They are unusual in that they have very great freedom of movement and financial independence and in many cases control the finances of the whole family. Its many differ points of any other upper castes. There is no doubt that the nature of a woman's economic contribution has important consequences for various aspects of status.

I described the Sweeper castes daily life in Bhangipura, most adults in Bhangipura are employed as sweepers in the Municipality.